

〈一般投稿論文〉 [研究論文]

指示表現のレトリック*

平 田 一 郎
学習院大学

The central mission of a referring expression is to provide the hearer with a clue to pick the particular person or object it is meant to refer to. However, some referring expressions, in addition to contributing to referent resolution, communicate certain specific feelings of the speakers toward the referents. When no alternative unmarked expression is available to a given referring expression, it does not produce any connotational meaning of this kind. I argue that the connotation of a marked referring expression is evoked by the M-principle advanced by Levinson (2000). The connotation of a marked referring expression, relying on contextual availability of the unmarked one, is a case of particularized rather than generalized conversational implicature.

キーワード： 指示表現、neo-Gricean、M 推意、connotation、特殊化された会話の推意

1. はじめに

発話文の中で指示表現 (referring expression) が果たす一番の役割は、発話者が意図した指示対象を聞き手に特定させることである。そして多くの場合、発話者と聞き手が同じ指示対象を想起できる限りにおいて、一番情報量が少ない指示表現が指示対象の指示語として選ばれる。しかしその一方で、指示表現の選択に発話者の特別な意図が感じられる場合がある。

(1) {That bulldozer / the guy} in the back row should be told to leave.

(Carston 2002: 348)

(1) の主語 that bulldozer は、発話者と聞き手が特定できる (おそらくは騒がしいか、何らかの不適切行為をしている) 人物を指していると思われる。この場合 that bulldozer と

* 本稿を執筆するにあたり、吉村あき子先生に大変お世話になった。また編集委員、査読委員の方々から貴重なご意見やご示唆を頂き、論文の大きな改善につながった。深くお礼を申し上げたい。もちろん、論文の不備や誤りなどはすべて筆者の責である。

いう表現の辞書的・概念的意味が人間を表すことはない。この *that bulldozer* は指示表現として用いられた隠喩表現である。(関連性理論の枠組みで言えば、*bulldozer* の意味が拡張し、アドホック概念として使われているということになる。) 全く同じ意味内容は *that guy* でも伝えることができるが、*that guy* の代わりに *that bulldozer* を使うことで、*that guy* と言った場合とは違ったニュアンスが伝わる。そしてもちろん両者の意味の差は、*that bulldozer* が隠喩として使われていることに原因を求めることができる。

しかし指示表現に特別なニュアンスが感じられるのは、指示表現に隠喩などのアドホック概念が用いられている場合に限定されない。

(2) Sheldon: Oh, come on, Leonard! This is obviously about Penny.

Leonard: It doesn't matter. The woman's not interested in me, the woman rejected me.

(11:25-, "The Fuzzy Boots Corollary," *The Bing Bang Theory*, Season 1.)

(2) は、誘おうと思っていた女性 (Penny) にボーイフレンドがいることを知った Leonard が不機嫌になっていて、友人の Sheldon がそれをなだめようとしている場面である。Leonard にとって Penny は仲の良い隣人で、通常 Sheldon と Leonard の会話では Penny、あるいは特定が可能な場合には she/her と言及されている。しかしこの場面では、Sheldon が先に *this is obviously about Penny* と Penny を話題にしているのに、Leonard はより自然な Penny や she ではなく *the woman* と Penny を呼んでいる。次の三点に注目したい。まず、先の (1) とは違い、Penny という女性を *the woman* という単語の辞書的な意味概念を用いて指示することには何も問題がない。*the woman* は意味の拡張を伴ったアドホック概念ではない。次に (2) の *the woman* という指示表現には発話者の意図的な選択が感じ取れる。Leonard が Penny/she と言わないことには理由がある (Leonard の Penny に対する心理的距離などが暗示されている)。三点目として、*the woman* という表現自体に心理的な隔たりを示す意味がそもそも備わっているのではない。これは (3) のような発話での *the woman* には話者の憤りが感じられないことからわかる。

(3) I had finally met a woman I wanted to get to know, and the woman turned out to be a vegetarian.

(3) で話者は発話の前半で *a woman* とある女性を会話に導入し、発話の後半で同じ人物を *the woman* と呼んでいる。聞き手は、*the woman* が誰のことか個人的に特定できていない。この場合、話者はたとえわかっていたとしても *woman* を (Penny のような) 固有名を使って指示する選択肢はない。(3) では、*the woman* が純粹にある女性を特定するための指示表現として用いられていて、(2) で感じられるような発話者の作為的単語選択や、心理的な隔たりの含意は感じられない。言い換えると、指示表現は時としてコンテク

ストの中でだけ特別な意味を帯びる。以下、本論文ではこのような言語表現を「指示表現のレトリック」と呼ぶことにする。

本論文の目的は、指示表現のレトリックを Levinson の提唱する M 原理 (Horn の語用論的分業) を用いて説明することである。M 原理は、ある有標の表現が、それに対応する無標の表現が (I 原理によって) 意味するのとは別の意味を伝えるという主旨の原理である。指示表現の場合も、実際に使われている指示表現と同じ指示対象を指示できる別の無標表現が想起できる場合にだけ、レトリックの効果が現れる。このことから、実際に使われている有標の指示表現は「話者が使うことができたはずであるが使わなかった無標の指示表現」が表せない意味を表すと主張する。その際に、(1) M 推意の働く範囲を denotation から connotation にまで拡張する必要がある、(2) 無標の指示表現と有標の指示表現の対はコンテキストによって語用論的に決定される、という2点の修整を M 原理に加える必要があることを示す。最後に指示表現のレトリック効果が一般的会話の推意ではなく、特殊化された会話の推意であること主張し、さらに指示表現のレトリック効果と侮蔑語が持つ慣習的推意との平行性を指摘する。

2. 指示表現とコンテキスト

1 で見たように、指示表現は時としてコンテキストの中でだけ語用論的な意味を持つ。この節では、そのような指示表現のレトリックの例をさらに2例見る。理論的な議論は3以降にゆだねて、ここでは指示表現のレトリックの効果を経験的な事実として確認することに集中する。

例はどちらもアメリカのテレビ番組 *Gilmore Girls* の会話からのものである。はじめの場面では、娘 (Rory) と喧嘩した母親 (Lorelai) が自分の母親である Emily に電話をかけている場面の会話である。Rory は家を飛び出し、おばあちゃんである Emily の家にいる。

- (4) Lorelai: Okay, um, ashe's there with you. So how did bshe get there?
 Emily: cShe took a cab.
 Lorelai: Well, let me talk to dher.
 Emily: eShe seems quite upset. fShe said you'd had a fight.
 Lorelai: We had a disagreement.
 Emily: gShe said fight.
 Lorelai: Will you just put hher on the phone please, Mom.
 Emily: I think we should give iher a little time to collect herself.
 Lorelai: Thank you for your input. Can I please talk to jmy daughter?

(27:30-, "P.S. I lo...", *Gilmore Girls*, Season 1.)

会話で2人の関心事は Rory なので、ずっと Rory は代名詞 she/her で指示されている。しかし、Rory を電話口に出させない Emily の態度に業を煮やした Lorelai は、最後に (4j) で she/her ではなく、my daughter と Rory のことを呼んでいる。この発話には、「Rory と話がしたい」という発話の主命題の他に、「私は Rory の母親であり、Rory は私の娘なので話をさせてもらう権利があるだろう」という Lorelai のメッセージが読み取れる。しかし、いうまでもなく、my daughter という表現にそのような語用論的メッセージが常にあるわけではない。例えば出会ったばかりの母親同士が、自分の娘の歳を教え合っているような場面で、my daughter is 5 years old と発話しても、my daughter に自分の娘を特定する以外の特別なニュアンスは全く感じられない。この場合、母親同士はお互いの娘の名前を知らないので、名前を使って指示するという選択肢がない。指示表現のレトリックは、実際に使われていない無標の表現が想起できるときにだけ現れるのである。

次の例も *Gilmore Girls* からのものである。Emily (母親)、Christopher (娘の昔の交際相手)、そして Lorelai (娘) の間の会話である。Christopher は最近別の女性 (Shelly) と出会い、結婚する予定のようである。Lorelai はそのことで特に感情的にはなっていないが、Emily は、そのことをかなり不快に感じている。

(5) Emily: You have a girlfriend?

Christopher: Sherry.

... (この後しばらく別の話をして、再び次の so をきっかけに Sherry の話に戻る。)

Emily: So how long have you been with this woman?

Christopher: Eight months.

...

Emily (Lorelai に対して): You've met this woman?

Lorelai: Yes, Mom, I met "this woman" today and she's very nice.

...

Emily: So you're planning on having a family?

Christopher: What?

Emily: With this woman?

Lorelai: Her name's Sherry, Mom, and you're really putting Chris on the spot here.

...

Emily: It was in the New York Times Magazine. I'd hold off buying a place with this woman until you look into this.

Lorelai: Sherry, Sherry.

(7:40-, "It should've been Lorelai," *Gilmore Girls*, Season 2.)

Emily は Sherry を 4 回 *this woman* と呼んでいる。(5a) ではじめて Sherry が会話の話題になり、ここでは Emily にとって Sherry は未知の女性なので *a girlfriend* として会話に導入されている。次に (5c) で Sherry を指示するのに Emily は *this woman* を用いている。これは今聞いたばかりの女性を指示するのに特に違和感のない表現である。(むしろ *that woman* とするよりも親しみを込めた感じがあるかも知れない。この点はまた後に論じる。) しかし、Emily が Sherry を *this woman* と呼び続けることに対し、Lorelai は女性の名が Sherry であることを度々注意喚起している (すなわち Sherry に対して *this woman* という表現を使うことの不適切性が会話が進むにつれ増してきている)。*this woman* に意味論的に話者の指示対象に対する不快感がコード化されているわけではない (そうであれば、*this woman* は、使われる発話の状況に関係なく否定的態度が感じられるはずだからである)。また、会話が進むにつれて Emily が *this woman* を使い続けることで、Emily の Sherry への不快感が明瞭になっていくことがわかる。この例も指示表現がコンテキストの中で特別な意味を持つことを表すよい例となっている。

これまで見てきたどの指示表現のレトリックの例でも、別のより自然な指示表現を聞き手が容易に想起できる点に注意したい。(2) の *the woman* は Penny、(4) の *my daughter* は *her*、(5) の *this woman* は Sherry がより自然である。したがって聞き手は、これらの単語選択に「敢えて」これらの表現を使うという発話者の意図を感じ取る。また、どの指示表現に対しても、((3) で見たように) 特別なニュアンスを伴わない文を容易に作ることができる。指示表現のレトリックはコンテキストの中ではじめて関知されるのである。3 では、指示表現のレトリックに関係する先行研究を検討しながら、4 での提案につなげていく。

3. 研究対象と先行研究

この節では、はじめに本論で研究対象とする指示表現を明確にし、後半では指示表現のレトリックの先行研究を概観する。

形式意味論的にいうと指示表現は変項、(非論理的) 定項、そして定名詞表現に分けられる。それぞれ例を示す。

- (6) a. 変項: *she, he, it, they, (this, that, these, those ...)*
- b. 定項: *Shelby, Kyle, Lucy, Joey ...*
- c. 定名詞表現: *the young girl, the cute boy, the guy I met yesterday ...*

モデルを利用した意味論の考えに基づくと、変項は指示対象が所与のモデルの中で変化する、定項は同じモデル内では常に同じ対象を指示する。定名詞表現は、与えられたモデルの中で唯一的に指示対象を選ぶに十分な意味的指定を受けた名詞表現である。直示的な

this や that などとも状況に応じて指示対象が変わるのでここでは変項に区分しておく。

本論では、これらすべてを指示表現 (referring expression) と呼び、これらすべてを研究対象とする。(6) の各表現は意味論的に違った形で文の真理条件に貢献する (より厳密に言えば、意味論的に違った形で指示対象をモデルの中から選び出す)。しかしもし2つの別の表現が同じ指示対象を持つ場合、どちらの指示表現を使っても文全体の命題の真理条件は変わらない (ライプニッツの法則)。¹ 本論で扱う例はすべてこのライプニッツの法則が成立する文脈なので、以下では各発話の、発話全体の意味論的な違いに注意を向ける必要が無い。

1つの指示対象に、意味論的に異なる複数の指示表現が使用可能な場合 (ライプニッツの法則が成立する場合)、表現の選択は語用論的な問題となる。語用論的にある指示対象に対し、どの指示表現が使われるかに関して、様々な研究がある (Prince 1981、Ariel 1988, 1990、Hawkins 1991、Gundel et al. 1993 など)。これらの研究では、どのような語用論的原理に基づいて、実際に使われている指示表現が選択されているかが議論されている。例えば Gundel et al. (1993) の Givenness Hierarchy では、指示表現同士の指定された階層と Grice の量の格率から、実際に選択される指示表現が選ばれるという提案がされている。また Ariel (1988, 1990) では、指示対象が特定できる範囲で最も情報量の少ない (意味内容を吟味するコストが低い) 表現が選ばれるべきであるとの主張がされている。² Hawkins (1991) は、主に不定冠詞と定冠詞の使い分けを <the, a> という Horn scale によって Q 原理から説明しようと試みた論考である。

これらの研究は、語用論的にどのように適切な指示表現を選択するかという研究で、本論で取り上げている指示表現のレトリックと直接は関係が無い。例えば Gundel et al. (1993: 292) は、指示表現の選択が提案されている原理に合致していない場合、発話は不適切 (infelicitous) になるとして、(7) のような例を挙げている (話者 M が指示代名詞 these で何かを指示しようとしているが、聞き手 L がそれを特定できず、会話が成立していない)。

(7) M: These. Do these go in here or there?

L: These?

(8) Geraldine Ferraro has been an active Democrat for quite a few years. But she/??Geraldine Ferraro ran for Vice-President only in 1984.

¹ ライプニッツの法則に関しては、Cann (1993: 263)、Huang (2014: 230) を参照されたい。

² 指示表現のレトリックが生まれる前提条件となる、より適切な無標の指示表現は、このような語用論的仕組みが働いて想起されていると考えられる。

Ariel (1988: 69) も、(8) のような例で、話者が一度 Geraldine Ferraro と特定の人物を会話に導入し、同じ人物を直後に再び Geraldine Ferraro と呼ぶことは不自然だ (bizarre) としている。本論で問題にしたいのは、複数の指示表現が意味論的に同じ指示対象を指示しえて、なおかつ語用論的にも同じ指示対象を指示しうる場合に (すなわち、聞き手も発話者も指示対象が特定可能である場合に)、「目立つ」有標の指示表現の選択が持つ語用論的な意味である。言い換えれば、Gundel et al. (1993) や Ariel (1988, 1990) の基準に照らして、利用可能な指示表現が複数ある場合、より有標な指示表現の選択が無標な指示表現に対して持つ語用論的な意味の究明を本論では試みる。

さらに、(1) で見たような隠喩やメトニミーのような (関連性理論で言えば意味の拡張を伴っているような) 指示表現や、指示表現自体に語彙的に主観的な評価がコード化されているような例も本論では研究の対象としない。そのような表現は、文脈に関係なく、一定の非命題の意味を聞き手に伝えることは明らかだからである。

次に指示表現のレトリックとここで呼ぶ現象の先行研究を見ておく。指示表現のレトリックを正面から取り上げた先行研究は、著者の知る限り存在しない。しかし、指示表現が指示対象の特定以外に何らかの語用論的 (非真理条件的) な意味を持ちうることは、多くの意味論研究者、語用論研究者によって指摘されている。例えば Grice (1989: 25) は、(9) の文の主語に関して、発話者が Harold Wilson と The British Prime Minister が同じ人物だと特定できる場合に、どちらの指示表現を用いた場合であっても、それらの表現が持つ含みが協調の原理によって説明できると示唆している。

(9) {Harold Wilson/The British Prime Minister} is a great man.

Grice は具体的にこの問題をこれ以上論じていないが、本論で指示表現のレトリックと呼んでいる現象が協調の原理によって説明されるべき語用論的な現象であると Grice によって認識されていたことがわかる。

Neale (1999) は、一つの発話から複数の命題を作るべきであるという複数命題理論を提唱する議論の中で、指示表現のレトリックに関係する例を挙げている。ギリシャには、全く同じ土地を指す Vivlos と Tripodes という単語がある。どちらの単語を使っても、それが指し示す場所は完全に一致している。どのような状況を想定しても Vivlos と Tripodes が別のものを指示することはないので、この単語の違いに意味論的・概念的な違いがないと考えられる。

この問題を解決するために Neale は、文の真理条件的主命題とは別に、Vivlos や Tripodes という固有名詞自体を意味の一部として表示する別命題を表示する方策を提案している。しかし、この方策が2で見た the woman のような指示表現の語用論的意味を説明できないのは明らかである。というのも、Vivlos/Tripodes の場合、まさしく違った単語が使われているというその事実で非真理条件的意味の違いが説明されるからである。(2)

と (3) の対比で見たように、the woman の場合、全く同じ表現が違った語用論的效果を持つので、実際に使われた表現を意味表示の一部とするだけでは、本論文で問題にしている直示のレトリックは説明できない。

Huang (2014: 219-220) は、Sindell and Enfield (forthcoming) の観察を引用して、ある指示対象に対する一定の指示表現の選択が、話者の指示対象に対する否定的態度を表現することがある、という指摘をしている (Sindell and Enfield (forthcoming) は、Sindell and Enfield (2017) として出版されている)。

- (10) You know who voted for it, might never know. That one. You know who voted against it? Me. (Sindell and Enfield 2017: 234)

(10) は 2008 年に行われたアメリカ大統領選挙の討論会での John McCain 氏の発話である。McCain 氏は、聴衆に向かって Barack Obama 氏のことを that one と呼んでいる。これは明らかに、Mr. Obama や Senator Obama に対して marked な指示表現の選択で、話者 McCain 氏の指示対象に対する侮辱的な意図が読み取れるという分析をしている。Huang (2014: 219) は、そのような意味が that に備わるコード的な意味であるとしている。具体的には this が話者の指示対象に対する共感性を表すのに対し、that は心理的な距離を表すとされる。同様の観察は Swan (2005: 583-4) でもなされている。

- (11) a. Now tell me about this new boyfriend of yours. (acceptance or interest)
b. I don't like that new boyfriend of yours. (dislike or rejection)

これに対し、Sindell and Enfield (2017: 233-236) はこのような意味がコード化された意味というよりは、文脈によって生まれる推論的な意味であるとしている。やはり Sindell and Enfield はこれ以上の考察を加えていないが、this+名詞のような形が常に話者の指示対象に対する心理的な受け入れや関心を示すわけではないことは、(5) の例からも明らかである。Huang (2014) や Swan (2005) のように this/that+名詞の意味を固定化して考えてしまうと、状況の変化に伴って徐々に話者の指示対象に対する不快感が明確になっていく (5) のような例を説明することができない (もちろん、そもそも this woman が話者の指示対象への不快感を表すことがあるという事実も説明できない)。³

³ Lakoff (1974: 351-352) は that+名詞が話者の指示対象に対する共感性を表すこともあるとしている。

(i) How's your/that throat?

(i) は、医者が患者の様態を尋ねる場面での発話である。your を使うと医者は、患者の喉が自分とは関係がない外的対象として捉えているという感じがし、that を使うとより患者とともに喉の様態を案じているという感じがするという。(この場面では this が使えない点に注意。)

4. M原理による説明

これまで確認したように、指示表現のレトリックは、実際に使われている（有標の）指示表現に対し、「話者が実際には使わなかったが、使うこともできた」無標の指示表現を聞き手が想起できる場合に現れる。有標表現が無標表現との対立によって推意を生むという現象は、McCawley (1978)、Horn (1984, 2004)、Levinson (2000) 等で指摘され、主に Grice の様態の格率を再解釈することで説明が試みられている。以下では、その代表的研究である Levinson (2000) の M 原理を用いて指示表現のレトリックの説明を試みる。

まず Levinson の M 原理がどう働くかを見ていこう。(12) が M 原理である。

(12) *The M-Principle*

Speaker's maxim: Indicate an abnormal, nonstereotypical situation by using marked expressions that contrast with those you would use to describe the corresponding normal, stereotypical situation.

Recipient's corollary: What is said in an abnormal way indicates an abnormal situation, or marked messages indicate marked situations, specifically: Where *S* said “*p*” containing marked expression *M*, and there is an unmarked alternate expression *U* with the same denotation *D* which the speaker might have employed in the same sentence-frame instead, then where *U* would have I-implicated the stereotypical or more specific subset of *d* of *D*, the marked expression *M* will implicate the complement of the denotation *d*, namely *d'* of *D*.
(Levinson 2000: 136-137)

(13) a. Sally was knitting. Occasionally *she* looked out of the window.

b. *She* refers to Sally. (I 推意)

(14) a. Sally was knitting. Occasionally *the woman* looked out of the window.

b. *The woman* does not refer to Sally. (M 推意)

(Levinson 2000: 138)

(13a) と (14a) の後続文は、ほぼ同内容の意味（女性と特定できる人物が時々窓の外を見た）を表している。she も the woman も、意味論的には Sally かもしれない別の女性と特定できる人物を指示しうる。すなわち、有標表現の the woman が Recipient corollary の there is an unmarked alternate expression *U* with the same denotation *D* which the speaker might have employed in the same sentence-frame instead を満たしている。しかし無標の表現である she は、「無標の表現を典型的な (stereotypical) 意味にまで補充して解釈せよ」という主旨の I 原理によって、(13b) のように直前の文に現れる Sally を指示すると推意させることになる。(14a) の the woman は (13a) の she に対して有標な表現

であるため、無標の *she* が意味論的には指示することができても、I 推意によって排除された指示対象（すなわち *Sally* 以外の女性）を聞き手に推論させる。より正確に言うと、*the woman* は *she* の I 推意からは外れた (14b) を (Recipient corollary の *the complement of the denotation d , namely d' of D* として) M 推意させることになる。

こうした M 推意の計算は、無標の表現 U とそれに対する有標の表現 M との間でだけ成立する。有標性を Levinson (2000: 137) はプラグ学派の伝統を踏襲し、(15) のように規定している。

- (15) [M]arked forms, in comparison to corresponding unmarked forms, are more phonologically complex and less lexicalized, more prolix or periphrastic, less frequent or unusual, and less neutral in register.

(15) の基準によれば、(14a) の *the woman* は (13a) の *she* はよりも *more phonologically complex and less lexicalized* で *more prolix or periphrastic* なので有標と判断されることになる。Huang (2014: 63) に倣って M 推意を生む集合を表示するなら、{*she, the woman*} のような U と M の scale が (15) の基準によって関知される場合にだけ M 推意が生まれることになる。この制限は指示表現のレトリックでも後に重要な役割を果たすが、まずはこのことを (16)–(18) の通常の M 推意の例で確認しよう。

- (16) a. The Spanish killed the Aztecs.
 b. The Spaniards slaughtered the Aztecs directly. (I 推意)
- (17) a. The Spanish caused the Aztecs to die.
 b. The Spaniards killed the Aztecs indirectly, e.g., by disease and hard labor.
 (M 推意)
 c. {killed Aztecs, caused the Aztecs to die}
- (18) a. Bill caused Mary to drop her parcel.
 b. No implicature ‘by some extraordinary means’ (M 推意なし)
 c. { \emptyset , caused Mary to drop her parcel}

(Levinson 2000: 141)

語彙的な使役 (16a) と迂言的な使役表現 (17a) が (17c) で示したように有標対無標の対になっている場合、語彙的で無標の表現 *kill* は、その最も典型的な殺し方（すなわち直接手を下した殺し方）を (16b) のように I 推意させる。対照的に迂言形で有標の *cause to die* は、(17b) のような、病疫や過酷労働の強制のように間接的に死に至らしめたことを M 推意させる。

これに対し、(18a) の迂言的使役 *cause to drop* は、(18c) に \emptyset と表示したようにこれに対応する語彙的な使役が存在しない。すると *cause to drop* は「有標表現」とはカウ

トされず、「何か特殊な方法で小包を落とさせた」という M 推意が (18a) には生まれな
ない。

こうした無標表現と有標表現による I 推意と M 推意の語用論的分業は、本論で問題に
している指示表現のレトリックをうまく説明する（後に問題点にも触れる）。まず (2) の
the woman の例を思い出してみよう。the woman は Penny（あるいは she）に対して
more phonologically complex and less lexicalized でまた more prolix or periphrastic な
ので（Penny に対する）有標表現として機能する。これによって、無標と有標の M scale
である {Penny, the woman} が形成される。これが聞き手に、Penny という指示表現で
は伝わらない M 推意が the woman にあることを知らせる。自分の親しい友人をこの状況
で the woman と呼ぶのは、明らかに Penny と呼ぶよりも親密感が薄く、他人行儀であ
る。the woman は知人以外でも成人女性であれば誰でも指示できるが、個人名である
Penny の使用は指示対象を個人的に特定できることが前提となるからである。発話者の
Leonard は Sheldon に、少なくともこの発話の瞬間、Penny を名前と呼ぶほどの親近感
を抱いていない（あるいは心理的な距離を取っている）ことが聞き手に推意されることにな
る。

この説明を成立させるには、(12) Recipient's corollary を少し発展させる必要がある。
(13a) と (14a) の場合、she も the woman もほぼ同じ幅の denotation を持つ。これは
(12) の an unmarked alternate expression U with the same denotation D の部分に M 推
意が生まれる前提条件として明記されている。ここで denotation は、「実際世界での事態
のありよう」を指していると解釈できる。she も the woman も、聞き手が特定できると
話者が判断するすべての女性を指示できる。しかし先に見た I 推意と M 推意の分業によ
り、それぞれの表現が実際世界では別の人物であることを聞き手に伝える。

これに対し {Penny, the woman} の場合、これらはどちらも同じ指示対象を持つ指示
表現なので、このどちらの表現を使ったとしても聞き手に伝わる「実際世界での事実のあ
りよう」は変わらない（ライブニッツの法則が成立している）。Penny と the woman の意
味論的な意味はもちろん違う。一般的に Penny が指示できる人物と the woman が指示で
きる人物とでは、後者がはるかに多いことからその意味論的な違いは明らかである。し
かし本論で問題としている、発話者も聞き手も同じ人物を特定できる 2 つの表現の場合、
そのどちらを選択しても (12) でいわれている denotation は完全に重なる。したがって
(12) をそのまま採用すると、有標の the woman の持つ M 推意はゼロになる。the
marked expression M will implicate the complement of the denotation d , namely d' of
 D の部分の d' が存在しえないからである。

そこで (12) の Recipient's corollary の最後の部分の the marked expression M will
implicate the complement of the denotation d , namely d' of D の続きに、次のような 1
文を追加することを提案する。

- (19) *Recipient's corollary*: ..., the marked expression *M* will implicate the complement of the denotation *d*, namely *d'* of *D*. If no *d'* is available, the connotation of *M* that *U* does not have will be ostensively communicated.

(19) の下線部を付け加えると、無標/有標の scale の {U, M} がある場合、有標の表現 M は無標の表現 U の持ち得ない非概念的意味 (connotation) を明瞭に伝える働きを持つことになる。the woman にはこの発話で Penny にはないよそよそしさが感じられるが、それは両者の denotation の違いではなく connotation の違いとして捉えられることになる。

(19) の下線部、そして (19) で定義される M 推意全体は、無標表現 U と有標表現 M の対の存在が前提となっている。これは、たとえある発話で (他の発話での) 有標表現があったとしても、その同じ表現が必ずしも常に有標表現になって M 推意を生むわけではないことを意味する。ある表現が有標であるかどうかは、その発話での無標表現が想起できるかどうかという相対的な尺度によって決定されるということになる。同じ表現が、ある発話では有標で、別の発話では無標ということがありうることになる。

ここで (3) の the woman の例を思い出されたい。(3) では、少なくとも聞き手は the woman の名前を知らないと考えられる。(2) の場合と違い (3) では、the woman を有標にする無標の表現が想起できない。(2) とは違い、(3) の場合、{∅, the woman} のように M scale が成立せず、M 推意が生まれないことが正しく予測される。

Huang (2014: 181, note 9) も、Levinson (2000) の語用論的推論原理を、表現が持つ denotation だけではなく、connotation の説明にも適用している (Huang 自身は connotation に適用しているとは明言していない)。Mr という呼びかけはやや失礼な注意喚起としての使い方があり (Fillmore 1997: 119)。これは Mr という表現に対し、より丁寧な Sir が存在し、(20a) のような Horn scale が形成されるからであるとされる (Mr と Sir の場合は、無標/有標ではなく語彙的丁寧さの度合いの差なので Horn scale が想定されている)。

- (20) a. <Sir, Mr>
b. <∅, Miss>

Q 原理の「できる限りを言え」という要請が、Mr と言った場合に Sir と言う立場に話者がいないことを Q 推意させ、Sir に対して Mr がより失礼な意味を伝える。これに対し、Miss の場合には、Mr に対する Sir のような呼びかけ語が存在せず、(20b) のように scale が成立しないので、失礼な注意喚起の呼びかけとしては使えないと説明されている。呼びかけは、本論でも問題としている指示表現同様、呼びかけられている人物が特定されるかぎりにおいて、どの呼びかけ表現を用いても「実際世界での事態のありよう」は変わらない。しかしどの呼びかけを使うかで、発話者の聞き手に対する社会的立場の取り

方という connotation が変化する。この <Sir, Mr> の場合は、本論で検討している M 原理ではなく Q 原理に関する考察ではあるが、非真理条件的な connotation にも Levinson の原理が適用できる可能性があることを示していると考えられる。⁴

(10) の Huang/Sindell and Enfield の例に戻ると、Huang 自身が指摘するように、この発話での *that one* には、より適切な（すなわち無標である）*Mr. Obama* や *Senator Obama* が存在する。すると {*Mr. Obama/Senator Obama, that one*} という対が聞き手に想起され、話者の指示対象 *Barack Obama* に対する敬意の欠如が M 推意されることになる。しかし *that one* という表現自体にそもそも敬意の欠如が語彙的にコード化されているわけではない。例えば公園で遊んでいる、名前を知らない子供達について話していて、*this boy is taller than that one over there* と発話するような場合には、同じ *that one* でも対となる無標の表現が想起できないことから有標表現とは認識されず、M 推意は生まれない。

Swan の指摘する (11) でも同じ説明が成り立つ。(11a) の *this new boyfriend of yours* も (11b) の *that new boyfriend of yours* も、ともに無標表現は（より *prolix or periphrastic* でない）*your new boyfriend* であると考えられる。聞き手は自分自身のボーイフレンドなのであるから、いちいち *this/that* で指定しなくても指示対象が容易に特定できるであろう。ここでは {*your new boyfriend, this/that new boyfriend of yours*} という対が想起でき、*this* によって心理的な近さが、*that* によって心理的な遠さが *your new boyfriend* との比較で M 推意される。だからといって常に *this/that* が心理的な近さ/遠さという意味を connotation として持つわけではない。この点は (5) を例に再び検討する。

次に (4) の例を考察していこう。ここでは *Emily* も *Lorelai* も話題の中心である *Rory* を一貫して *she/her* と呼んでいる。しかしなかなか娘を電話口に出さない母に業を煮やした *Lorelai* は、(4j) で突如 *she/her* から *my daughter* へと指示表現を変化させている。*my daughter* は *she/her* に対し *more phonologically complex and less lexicalized* であり、*more prolix or periphrastic* である。これによって {*she/her, my daughter*} の M scale が聞き手に想起される。そして {*she/her, my daughter*} の M scale では、*she/her* が持ち得ない *my daughter* の connotation が M 推意として伝えられることになる。*she/her* だと単に指示対象が女性であるとわかるだけであるが、*my daughter* の場合、指示対象が女性であるという情報に加え、発話者と指示対象が密接な親族関係にあることがわかる。発話者と指示対象の密接な関係が M 推意されることになるのである。

⁴ Horn (1984: 16) でも、フランス語の *tu/vous*、ドイツ語の *du/Sie* の使い分けが Q 原理によって説明される可能性が示唆されている。

(5) の例では、Emily が指示対象が Shelly という名の女性であることをはっきりと意識した後ですら Shelly を *this woman* と呼ぶことで、Emily の Shelly に対する心理的な距離が強調されている。(5b) で一度 Sherry という名前が登場しているが、その後しばらく別の話をした後、(5c) で Emily は再び Sherry を話題にする。ここで Emily は指示表現として Shelly を使ってもいいかも知れないが、一度だけ名前を聞いたことがあるだけの女性を、再び話題にするのに *this woman* と呼ぶことにそれほどの違和感はない。日本語で言えば「さっきの女性のことだけど」、のようなニュアンスであろう。(判断は微妙であるが、*that woman* というよりはむしろ話者自身に指示対象を心理的に近づけていて、その対比でいえば、*this woman* の方がより好意的な印象もあるかもしれない。) したがって会話の (5c) の段階では、{ \emptyset , *this woman*} と、無標対有標の対は想起されていない。この段階では *this woman* に M 推意は感じられない。

しかし Lorelai は (5e) のように、Sherry を *this woman* と呼び続ける母を皮肉で (エコー的な使い方) たしなめたり、(5g) のように改めて Christopher のガールフレンドの名前が Sherry であることを母に認識させ、Sherry と呼ばせるように仕向けている。Emily はこれらすべてを無視して Sherry を *this woman* と呼び続ける。*this woman* は Sherry に対し *more phonologically complex and less lexicalized* で、*more prolix or periphrastic* であるといえる。これによって発話者聞き手ともに {Sherry, *this woman*} という M scale が段々と強く意識されることになり、Sherry に対する *this woman* の connotation、すなわち心理的な距離が M 推意されることになる。

(5) の説明でも決定的な役割を果たしているのは無標表現と有標表現の対である。Swan が (11) で提案しているように、*this/that* の表す話者の指示対象に対する気持ちをコード化された固定的なものと考え、(5) での *this woman* の connotation の変化を適切に捉えることができない (むしろ一貫して Emily が Sherry に好意的な気持ちを持っていると誤って予測されてしまう)。指示表現のレトリックは、コンテキストの中で捉えられるべき語用論的な推意なのである。

5. 推意の区分

Grice (1989) は、発話が持つ推意を大きく慣習的推意 (*conventional implicature*) と会話の推意 (*conversational implicature*) に分けた。会話の推意はさらに、一般的会話の推意 (*generalized conversational implicature*) と特殊化された会話の推意 (*particularized conversational implicature*) へと分けられる。慣習的推意は、語彙的にコード化された意味のうち真理条件に貢献しない部分を指す。例えば、等位接続詞 *but* が持つ「*but* に後続する言語要素の内容が聞き手の期待に反している」という意味が慣習的推意の例としてよく挙げられる。しかし Bach (1999) など後の研究で、*but* のような接続表現の意味が言

われたこと (what is said) の一部であるとする考えが有力となってきた。その一方で、Potts (2005) は、the jerk, the jerk Chuck, the stupid thing のような侮蔑語 (epithet) の意味を慣習的推意とする分析を展開している。

一般的会話の推意はコンテキストとは関係なくある発話が通常伝える (意味論的な意味を超えた) 意味のことである。Horn, Levinson, Huang といったいわゆる Neo-Gricean の研究者達は、Grice の協調の原理を再構成しながら、主に一般的会話の推意の解明を目指している。本論で採用している Levinson の Q 原理、I 原理、M 原理もこの流れの中の理論である。例えば、some of my friends are linguists という発話は、not all of my friends are linguists を文脈に関係なく推意させるが、これは「できる限りを言え」という Q 原理の生む一般的会話の推意として説明される。

特殊化された会話の推意は、コンテキストの中で生まれる推意である。coffee would make me awake のような発話が (発話者が起きている必要があるというコンテキストでは) コーヒーを飲みたいという推意を持ったり、(発話者が早く寝る必要があるというコンテキストでは) コーヒーを飲みたくないという推意を持つことを説明する。

すでに明らかなように、本論では、Levinson の提案する M 原理を一般的会話の推意ではなく、コンテキストに依存する特殊化された会話の推意を導くために利用している。この節では、この問題も含め推意の区分について議論する。

本論が拠り所としている Levinson (2000) の書名は、Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature で、ここからも Levinson が一般的会話の推意を説明するための原理を提案していることがわかる。構造的な語彙化が進んでいる尺度表現などにはコンテキストを考慮しない Q 推意の説明がうまくあてはまる。<all, most, many, some> のような尺度が与えられれば、右の表現を使うことで、それよりも左のより強い表現を使う立場に話者がいないことが Q 原理から (一般的会話の推意として) 推意されるであろう。

しかし、このような Q 原理でさえ、コンテキストによる尺度の指定が必要であることが度々指摘されている (Fauconnier (1975)、Hirschberg (1991)、Huang (2017) など)。Levinson (2000: 105) 自身も Q 原理の適用にコンテキストが与える尺度を考慮する必要がある場合があることを一部認め、これを Hirschberg scale と呼んでいる。Hirschberg scale は次のような Q 推意を説明する

- (21) A: How is Fred doing?
 B: He's got to Salt Lake city.
- (22) a. He's not got to Chicago. (Q 推意)
 b. <New York, Chicago, Salt Lake City, Reno>

(21) の会話では、Fred が西海岸から New York へ向けてマラソンをしていると想定され

ている。この想定のもとでは、聞き手と発話者の間で (22b) のような出発点からゴールまでの scale が生まれ、(21) の B の発話から、(22a) が Q 推意として導かれることになる。(21) で B は Q 原理により、自分が提供できる最大限の情報を提供していると理解される。(22b) の scale で Chicago は Salt Lake City よりも左の強い意味を持つので、(21) で B が Salt Lake City を肯定することで、(22a) のようにそれよりも強い意味を持つ Chicago の否定が推意されるのである。この例では、Fred が今どこを走っているかという denotation が推意の対象になっている。

これが Hirschberg scale (コンテキストによって決まる scale) であることは、Salt Lake City もこのようなコンテキストがなければ、Q 推意を持たないことからわかる。例えば特殊なコンテキストなしであれば、(23) の発話から Salt Lake City に Q 推意は生まれない。

(23) Howard went to Salt Lake City for business last month.

Hirschberg scale の生む推意は、まさしく推意がコンテキストに依存しているという理由で特殊化された会話の推意ということになる。(22a) は Hirschberg scale に基づく denotation に関する Q 推意で、指示表現のレトリックは無標と有標の表現の集合に基づく connotation に関する M 推意である。Q 推意を生む Hirschberg scale を Hirschberg Q scale と呼ぶとすると、指示表現のレトリックは、Hirschberg M scale と呼べるような、コンテキストに依存した対立表現に基づく特殊化された会話の推意であると考えられる。

また、そもそも尺度表現のような語彙的に構造化が進んだ表現による Q 推意と違い、M 推意を導く無標/有標の対立はかなりコンテキストへの依存性が高い。M 推意による分析の出発点であった McCawley (1978) では、M 推意を単に conversational implicature であるとし、それが一般的会話の推意であるのか、特殊化された会話の推意であるのかを特定していない (Horn 1984 も同様である)。(24) は McCawley (1978: 257) からの M 推意の例である。

- (24) a. John went from the kitchen to the living room.
 b. John ceased to be in the kitchen and came to be in the living room.
 c. John had by magic been made to disappear from the kitchen and reappear in the living room. (M 推意)

有標表現の (24b) からそれに対する無標表現である (24a) との対比に基づいて (24c) の M 推意を得るには、{went from the kitchen to the living room, ceased to be in the kitchen and came to be in the living room} という無標対有標の表現対を想定する必要があるが、これは語彙化された表現が本質的に持つ対立とは考えにくい。

Potts (2005) は、the jerk や the bitch のような侮蔑語 (epithet) が持つ、話者の指示対

象に対する主観的な意味を慣習的推意と分析している。Potts は、単語にコード化された（コンテキストとは独立した）意味であること、発話者の評価であること、文の構造から構成的に計算される意味とは独立していること（すなわち文の真理条件的な意味には関与しないこと）などの特徴を慣習的推意の特徴として挙げ、侮蔑語がこれらの基準を満たすとしている。例えば Emily が Christopher と Shelly に関する発話 (25) をしたとしよう。

(25) Emily: Christopher is going to get married to {Shelly/the bitch}.

聞き手が指示対象を特定できる限りにおいて、Christopher が結婚する予定の相手を Shelly と呼んでも the bitch と呼んでも文全体への真理条件に影響を与えない。また、Shelly を Shelly ではなく the bitch と呼ぶことで、Emily の Shelly に対する否定的な評価が（非真理条件的な意味として）伝わる。しかし、指示表現のレトリックの例とは違い、この否定的な意味は the bitch にコード化された、コンテキストに依存しない意味である（誰が誰をどの文脈で the bitch によって指示したとしても話者の指示対象に対する否定的な評価が伝わる）。したがって指示表現としての the bitch には慣習的な推意が備わっているというのが Potts (2005) の主張である。

このような慣習的な意味は、文の構造から構成的に計算される意味とは独立している。例えば (26) の間接引用文でこれを見てみよう (Potts (2005: 160) の議論を参考している)。

(26) Emily: Lorelai said that Christopher was going to get married to {Shelly/the bitch/this woman}.

ここで発話者も聞き手も the bitch が Sherry を指示することが明らかであると仮定しよう。すると (26) の発話は間接引用であるが、the bitch という単語のもたらす否定的な評価が、主語の Lorelai ではなく、発話者の Emily のものであると解釈される。the bitch は単語にコード化された意味として指示対象の否定的な評価を含み、その評価をしているのは主語の Lorelai ではなく話者の Emily である。構成的には said の補部に含まれる the bitch の意味は、主語 Lorelai の発話の意味の一部であるべきであるが、この構成的意味計算を無視して、the bitch の否定的な意味が発話者 Emily のものであると解釈されている。the bitch を Sherry に置き換えると否定的な推意が消えるが、その場合でも (26) の真理条件は変わらない。the bitch が持つ否定的な意味は、文の真理条件に貢献していない。

面白いことに、本論で考えたレトリック効果を持つ指示表現も同じ性質を示す。(26) で、再び発話者も聞き手も Christopher が今つきあっている女性が Sherry だと知っているとして、the bitch を this woman に置き換えて考えてみよう。その場合でも this woman には、否定的なニュアンスが感じられ、しかもその感情は主語の Lorelai ではなく

く発話者の Emily の感情であると理解される。⁵ また、ライブニッツの法則が成立している環境なので、this woman を Sherry に置き換えても文全体の真理条件は変わらない。ただし、繰り返し見たように this woman が話者の指示対象に対する否定的感情をコード化した意味として持っているわけではない。ではなぜレトリック効果を持つ指示表現が慣習的推意を持つ侮蔑語などと同じ性質を示すのであろうか。

侮蔑語とレトリック効果を持つ指示表現とを比較してみよう。侮蔑語の場合、話者の主観的な評価は単語そのものにコード化されている。これに対し、レトリック効果を持つ指示表現の場合には、それと対をなす無標表現との意味論的意味の差から主観的な意味が作られる。(4j) の {she/her, my daughter} の場合には、she/her には、指示対象が女性であるという意味しかコード化されていない。それに対し my daughter には、指示対象が女性であることに加え、指示表現を使用している人物と指示対象の持つ特別な親族関係が示されている。この差によって (4j) のレトリック効果が生まれている。{she/her, my daughter} という対の形成自体はコンテキストに依存し (すなわち Hirschberg M scale を構成し)、推意は両者の意味論的にコード化された意味の差によってもたらされている。侮蔑語同様、突き詰めると指示表現のレトリックは単語の意味論的な意味に行き着くのである。また、どちらも発話も denotation に貢献しない (あるいは真理条件に関与しない) 発話者の主観的な意味を表す。この点でも、指示表現のレトリックと慣習的推意は類似している。

侮蔑語とレトリック効果を持つ指示表現との関係はさらに究明されるべき余地が大いに残っているが、両者は互いに何らかの関係があることがうかがわれる。

6. おわりに

本論文では、ある指示対象に対して使われた有標の指示表現に対し、同じ対象を指示できる別の無標の指示表現が存在することが意識される場合に伝えられる語用論的な意味を考察した。こうした現象を指示表現のレトリックと呼び、その意味が生まれる仕組みの解明を試みた。同じ表現であっても、それに対応する無標の表現が存在しなければ指示表現のレトリック効果は生まれず、対応する無標表現が存在する場合にだけ指示表現のレトリック効果が生まれる。

⁵ Lakoff (1974: 354) は (i) の that toe に関して同様の観察をしている (that toe の持つ M 推意が主語の Dr. Knox ではなく、発話者の気持ちを表していると解釈している)。ただし、(i) の場合、(注3で見たのと同じように) his を無標に想定して that が使われているので、話者は that toe に対して (否定的な気持ちではなく) 真摯な気持ちで心配していることが推意される。

(i) Dr. Knox told Bill to soak that toe.

ある表現の語用論的な意味が、その表現と対比される別の表現との比較から推意されるとする neo-Gricean の語用論原理を発展させることで指示表現のレトリックが説明されると主張した。より具体的には Levinson (2000) の提案する M 原理 (有標な表現は有標な意味を伝える) によって、有標な指示表現が無標な指示表現にはない語用論の意味を M 推意させると提案した。その際、M 原理の適用範囲を denotation から connotation へと広げる必要があること、無標表現対有標表現を、語彙的に固定化された集合からコンテキストの中で得られる集合 (Hirschberg M scale) へと広げる必要があること、の2点を指摘した。Grice (1989) では、慣習的推意、一般的会話の推意、特殊化された会話の推意などに推意が分類される。指示表現のレトリック効果が特殊化された会話の推意に分類されることを示すと同時に、指示表現のレトリック効果と侮蔑語が持つ慣習的推意の平行性を指摘した。

参考文献

- Ariel, M. 1988. "Referential Accessibility." *Journal of Linguistics* 24, 65-87.
- Ariel, M. 1990. *Accessing Noun-Phrase Antecedents*. London: Routledge.
- Bach, K. 1999. "The Myth of Conventional Implicature." *Linguistics and Philosophy* 22, 327-366.
- Cann, R. 1993. *Formal Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Fauconnier, G. 1975 "Pragmatic Scales and Logical Structure." *Linguistic Inquiry* 6, 353-375.
- Fillmore, C. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Gundel, J. K., N. Hedberg and R. Zacharski. 1993. "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse." *Language* 69, 274-307.
- Hawkins, J. A. 1991. "On (In) definite Articles: Implicatures and (Un) grammaticality Prediction." *Journal of Linguistics* 27, 405-442.
- Hirschberg, J. 1991. *A Theory of Scaler Implicature*. New York: Garland.
- Horn, L. R. 1984. "Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature." In D. Schiffrin (ed.) *Meaning, Form and Use in Context (GURT '84)*, 11-42. Washington: Georgetown University Press.
- Horn, L. R. 2004. "Implicature." In L. R. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 3-28. Oxford: Blackwell.
- Huang, Y. 2014. *Pragmatics*, 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.
- Huang, Y. 2017. "Neo-Gricean Pragmatics." In Y. Huang (ed.) *The Oxford Handbook of Pragmatics*, 47-78. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, R. 1974. "Remarks on 'This' and 'That'." *Chicago Linguistic Society* 10, 345-356.

- Levinson, S. C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- McCawley, J. D. 1978. "Conversational Implicature and the Lexicon." In P. Cole (ed.) *Syntax and Semantics 7, Pragmatics*, 245–259. New York: Academic Press.
- Neale, S. 1999. "Coloring and Composition." In K. Murasugi and R. Stainton (eds.) *Philosophy and Linguistics*, 35–84. Boulder: Westview Press.
- Potts, C. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.
- Prince, E. 1981. "Toward a Taxonomy of Given-New Information." In P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, 223–256. New York: Academic Press.
- Sindell, J. and N. J. Enfield. 2017. "Deixis." In Y. Huang (ed.) *The Oxford Handbook of Pragmatics*, 217–239. Oxford: Oxford University Press.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*, 3rd edition. Oxford: Oxford University Press.

作品引用

- "P.S. I lo...", *Gilmore Girls*, Season 1, Warner Bros. Home Entertainment, 2001.
- "It should've been Lorelai," *Gilmore Girls*, Season 2, Warner Bros. Home Entertainment, 2002.
- "The Fuzzy Boots Corollary," *The Bing Bang Theory*, Season 1, Warner Bros. Home Entertainment, 2007.